

## 要旨

本研究は、医療における事故防止と安全文化醸成に資するといわれているインシデント・レポート(以下、レポート)について、これを書き、報告することを、看護職個人はどのように意識しているかを明らかにするための質的記述的研究である。

2013 年 11 月 31 日の時点で JCI (Joint Commission International)の認定を受けている国内の医療機関で働く、管理職以外の看護職(以下、スタッフナース)に調査協力を依頼し、2 病院から計 5 名がインタビューに参加した。インタビューから認識や感情、経験を抽出して分析した結果、スタッフナースのレポートを書き、報告する姿勢は、患者の安全を目的とした、個人の内省と組織への働きかけを望む姿勢であることが分かった。医療機関の安全文化が醸成されるためには、インシデント・レポートの収集が不可欠であるが、本研究での 5 名のスタッフナースがレポートを書き、報告する姿勢は、まさに患者の安全を最優先に考え、その実現を目指す態度と考え方を示していた。

また、本研究から、はじめから誰もがレポートを書き、報告する姿勢を持つわけではなかったことが明らかになった。初めて起こしたインシデントでの経験が、その後のインシデントにまつわる認識や気持ちに影響したことから、新人の初めてのインシデントの際の対応は、慎重に検討すべき課題であると考えられた。そして、スタッフナースの持つ認識や感情と、経験との関係から、新人の時期に行われるインシデントに関する教育には、3 つポイントが重要であること、インシデントの報告を促進するためには条件が必要なことを導き出した。インシデントの当事者として中心的な役割を担いながら、レポートを書き、報告する姿勢を育んできたと考えられるスタッフナースが、組織の安全文化醸成の担い手として重要であることを、組織もスタッフナース個人も認識すべきであろう。

また本研究では、医師のインシデントに関する姿勢の違いや報告する内容に関する諸問題、レポートの書式や報告方法に関する目的の混在など、安全文化醸成のためのその他の課題も抽出することが出来た。